

## 新井高子

### 朝をください

朝は、死体を数える時間です  
新聞で、病院で、路上で、海辺で、家だったはずの瓦礫の下で、  
もつと神憑かりしてよ、アメノウズメさん  
まだまだ朝が足りません  
まだまだ数えきれません  
まだまだ運びきれません  
もつと踊ってよ、アメノウズメさん  
髪に緑の枝さして、  
呼んでください  
死んだ人を、  
朝にください  
神憑かりして呼んでください

ズット、浮カンデイル、アタシデス  
踞マツタ、ママノ、オイラサ  
ボクデス、右腕ガ、モゲタノハ  
会イタイ、ヨ、会イタイ、ヨ  
コメカミニ、一発ノタマ  
搔イテ、喉ヲ、苦シンデ  
今ハモウ、沈ンデ、イクダケ  
ドーシテ、ナンデ、オレナンダ  
吹ッ飛バサレル、爆風ニ  
アットイウ間ノ、火ノ、手ガ、クル  
モガイテモ土砂、モガイテモ土砂  
天井ニ、片肺ヲ、潰サレテ  
コノママ、ドコマデ、漂ウノダロ  
差シ伸ベル、手ヲ、待ツテイテ  
ココデス、ワタシハ、ココデス  
血ミドロノ、学校カラ、逃ゲタクテ  
アタシノ、瞳ハ、開イタママ  
最後ノ、息ダト、自分デ、ワカル

爆音二ハ、モウ、飽キテイル  
海ガ、拳ヲ、上ゲタンダ

朝は、死体を数える時間です  
ニュースで、大使館で、公民館で、ビルやモスクだったはずの瓦礫の下で、  
もつと神憑かりしてよ、アメノウズメさん  
まだまだ朝が足りません  
まだまだ朝が足りません  
まだまだ朝が足りません  
もつと踊つてよ、アメノウズメさん  
胸乳をかき出し、髪ふり乱し、  
踏みとどろかし、  
踊つてよ  
腕ふり回し、汗かき散らし、  
首しならせて、  
踊つて、踊つて  
もつと、  
もつと、  
背を揺らし、脚ふり上げ、  
腰うねらせて、  
もつと、  
もつと、  
女陰を燃やし、  
女陰を開き、  
呼んでください  
踊つてください  
神憑かりして、  
集めてください  
死んだ人たち、  
その陰へ  
朝にください  
朝をください  
死体を数える時間です

月が昇ると、

だれもない紡績工場の夜勤です

電球はひとつだけ、

ひとりで糸車が回っていて

カシャン、というのは

ボビンがとり替えられる時の音です

ここが終いになって

もう十年たちますが、

月が昇ると、働きはじめるのです

珍しいオートメーション

戦後まもなく

機械に髪を巻き込まれ、

亡くなった女工さんがあったそうですが、

幽霊のしごとではありません

いえ、

漂うものもあるのですが、

工場にも、

癖がある、

こういうことです

癖というのは残りますから、

四十四年、糸繰りをしたばあさんは

今際の床でも

人さし指の先を舐めては撚り上げる、

そのしぐさから逃れることができません

冥土でも、そうでしょう

糸というのは限りなく細いですから

操つるものたちの肉体に

かえって身ぶりが染み込んでしまうのです、

とり憑いてしまうのです

ほら、

女工さんの手先から

すうっと、

生糸を引き抜けば、

いつまでも踊っているではありませんか

工場もそうです、

糸車の芯棒が  
覚えてる、  
鉄の粒子は  
回りつづけていた向きに  
もはや頭を垂れたままなのですから、  
ガラン、  
と乗りだします  
月光がそそぐとき、  
満ち干があるのは潮ばかりではないのです

ガラン、

ガラン

糸車が回ってる、  
糸たちが泳いでる、  
だれもない紡績工場

(『タマシイ・ダンス』未知谷、二〇〇七年)

## Wheels

火が来るよ、もうすぐここに火が来るよ、  
って 知らせつづける女の蛇がいますね、  
押入れの天袋に、ようようと住まっておったんです  
布団に入エるたび、  
その声 聞こえて、大きくなったから、姉さんも わたしも、  
しまいに 保(も)たなくなってしまうの、  
ぎゆうぎゆうに こめかみが張り込んで、  
今夜じゃねエか、今夜じゃねエか、  
消したか、切ったか、閉めたか、火の矢が入る隙間はないのか、  
目ン玉 落ッことですほど、確かめるよになってしまつて、

蛇は、三代前の女工さんの化身(かたみ)です  
すれ違う男衆が 振りかえる別嬪だったけども、  
慕った人に 騙されて、  
ヒロポンやるよになってしまつて、

寄宿から出られんほど、  
夢サ 見るよになつてしまつて、  
火が来るよ、もうすぐここに火が来るよ、  
火事の幻 見ておつた  
あッここに 火イ点かるの、焦がれてたンかもシんないねえ  
女ばつかしの工場だから、  
吸吞で水ふくますと、ちつと気もどりして、  
片頬が笑つたつてがア  
見ッ事な富士額が、せつな気で、  
火が来るよ、熱いよ熱いよ、  
つて 蒸気して、痙攣して、うなされ死した  
ここで葬式(ジャンボン)あげたつて、聞きました  
里の兄(あに)さんは もらいに来ねエで、  
形見になつた鬚さえ、  
とうとう天袋にしまい込まれて、  
それですよ、  
夜ごと 騒エでんのは、

焜炉の火、ストーブの炎、炬燵のレンタン、煙草盆、  
風呂の釜、雨戸の掛け金、窓の鍵、  
あんまり真剣だと、  
ひとつ見たあと、前のがわからなくなるもんです  
ソリヤ八百長だつて 蛇さまの声すれば、初めつからやりなおし、  
火が来るよ、もうすぐ来るよ、  
這いずらざるをえんのです  
糸繰り工場の 足もとに置く七輪、  
二人とも どんだけ目で舐めたか、わかんねエ

齧りッ付くから、声はおツかねエよ  
きっかけは姉さんで、  
ただ ふざけてただけなんです  
ふりしてただけなんですよ、女工さんの、  
風呂場の灯り まっ暗にして、  
火が来るよ、熱いよ熱いよ、つて 真似すンなもの  
わたしは 泣きました  
おどかす姉にしッがみついて 泣きました

びつくらしたただけなんです  
でも、

幼い姉は底光りして、冷えていく湯気の中で、  
真へ、迫って いきました

火が来るよ、火が来るよ、来るよ来るよ工場が燃えるよ、  
声が 声サ 手エかけて、  
来てしまった

踵(きびす)を返して、来てしまった  
ギイツと、

喰い込まれる、まッ裸の二人でした

布団サ おッくるまっつて、こらえてたけど、  
どうしても 這い出して、

背中に スーっと立っている、  
女工さんは、

いっしょに 火の元 のぞきこんでる

這って、這って、這いずって、

天井裏が 埃サ吐いて、

箆筒の把手が カタカタ鳴って、

腹に下りねエの！、実感が、

わからねエの、いっくらしても、

火の気サ見て、火の怪を 見つけてしまう、

わたしたちは、

消したかどうかの度が過ぎて、

消えてる焔炉の瓦斯穴が、

消えてる煙草の吸い殻が、

消えてる火鉢の燃え滓が、

灯ってしまふ、

見てしまふ、

怪し火を、

追ッかけるわたしを追ッかける姉さんを追ッかける女工さんを追ッかけるわたしは、  
追ッかける姉さんを追ッかける女工さんを追ッかけるわたしを追ッかけるわたしは、  
わたしたちは、

巴になって喘エでる 鼠です

乳サびくびく震わした 家鼠です

追ッ付かないの！

走り火に、

糸車が笑ってる

工場脇のドブ川のほとりで、よく花火したもんです  
仏壇から真鍮のローソク立て 持ってきて、

仏さんの火に、色紙よせて、

じんわり 火薬サ吸わします

ちつと咽せてから、

火は、

跳ねるでしょう、

回るでしょう、砂利けって、

子どものくるぶし 掠(かす)めとろうとするでしょう

水に映って、

プンッと 鼻緒が焦げたとき、

齧りッ付くんです、

火は、

ないでしょう、足が、仏さんには、

だから 喰らいッ付くんです

追われてンのは、わたしたち なんですよ

わたしたち、

なんですよ

糸車が笑ってる

まッ赤な夜具がありました

女工さんの古襦袢サ はぎ合わせたものでした

潜りッこめば、

面映ゆくて、風が喉を抜きました

いっそう潜れば、

西日が射して、らんらんと、

太った蛇が、

天袋から 這い出そうとしておりました

二匹の鼠を 狙ってました

瞳が 火色に 透けてました

めらめら、

炎が、

這ってくる、

燃えました、

女工さんが、

髪がほどけて、かげろうになりました

燃えました、

姉さんが、

反ッ歯から、ちよろつとベロを出しました

わたしは、

ドブツ端に立っていました

くるぶしが、

カッと裂け、

糸車が回ってる。熱風に回ってる。火の手をつかんで回ってる。執念深く回ってる。とぐろのように回ってる。宿世をにらんで回ってる。紡績工場は、火の車。火の渦のんで回ってる。どこまでも回ってる。いつまでも回ってる。

回ってる。

まッ赤な糸を紡いでる。

(『タマシイ・ダンス』未知谷、二〇〇七年)

## ナイロンスカーフ

織り子さんたち住んでたからネ

遊んでもらったよ、髪にケーキのリボン結んだりして、

母さんより若い女のからだってサ

強ばるの、あたしが抱きつくときネ、

ピタツとはり付かないの

おっぱいはふわふわなのに

木もれ陽みたいにさわぐ 透き間があって、

あ、それ、



恥ずかしさだなって、いまなら思うよ  
子どもが触わったって

ヒツと締まツちまんでしょう、淡い乳首が  
くすぐりたいのさ、こっちだって、

だから

わざと、抱きつきりにいくお尻の蒼いあたしがいて、

寄宿の壁にはね、

ギョロ目の外巻きカールの女、横ツつらのマフラー男、  
雑誌の切り抜きが、そこいらじゅう貼ってあってサ

ヘアスプレーのトンがった匂いの中で

きれーに化粧すんのは、織り子さんは、

濃いんです、水しよーばいと同じくらいに

女どうし張りあって

鏡に見入って、

子どもの頬ずりにだってサ

感じてしまう、

恥ずかしさを

閉じ込める、工場の電源いれて

轟音に揺さぶらして、

それって、

けたたましいディスコの壁に

一人ぼつちで凭(も)たれてンのと、そつくしだよ

わかるよ、いまなら

どうして工場に、いつまでも居残ってたか

いっしょに入ったの

ある晩、マツちゃんと

おかみさんちの風呂かりて、

洗ってくれたよ、せなかもあたまも

キューピーだって

泡だらけのあたしを立たし、笑ったよ

そうして、

いっしょに肩までつかり、五十かぞえて

変えました、

眼の色が、

サツと

金魚すくいがはじまりました  
いいえ、

いるわきやないんです

マツちゃんは

洗い場で手ぬぐいを広げてサ

神妙にひたしてサ

すくうんです、

湯舟に泳ぐからだの毛を

こどもは手伝わないで、ツて

何度も、何度も

すくうのよ、

もーないよツて言っただって

びしょびしょびしょびしょ

したたって、

びしょびしょびしょびしょ

どーやって

あたしらは

風呂場から出たんだか、

どんだけ湯ざめをしたんだか、

覚えてない

マツちゃんの名が

マチコか、マツコか

覚えてないよ

寄宿から出ていくときはね、

嫁入り道具に

おかみさんは、正絹(しょうけん)の袋帯もたしてヤンの  
くる日も、くる日も

牡丹やくじゃくや宝づくしの金襴を織ってたのにサ

好きなの取ちなって言われ、

いっとー地味な亀甲の柄

ながく締めれるからツてサ、

ナイロンスカーフのこれみよがしな極彩色が

だれより似合うマツちゃんが

お低頭(じぎ)して

そんな帯かついでいくとき、  
成人式よか  
ずっときつい水際から、飛びおりるんだネ  
どこへ行くか  
だから聞かれもしないで、

剥がされてたよ、

壁の切り抜きも、工員旅行のペナントも

セロテープだけ、もの欲しげに残ってて

おさげの先で撫でるとネ、

すーっと、一本、貼りついて

しなだれた

マツちゃんの金魚すくいを

あたしはだれにも言わなかった

マチコだかマツコだか、

化粧をおとした若い女工が

火照ったからだで、しかめた眉を

だれにも言わなかった

借り湯の水面が、

びしょびしょびしょ

波打ったのを、うねったのを、

拳が砕いた水鏡を、

言わなかった

なまぐさい飛沫(しぶき)と、

ひるがえる

真ッ赤な尾ひれを、

言わなかったよ、言わなかったよ

だれにも、

マツちゃんが

見したくなかったのは、

お湯にとけた何だったか

何が

とけたのか

ヘアスプレーの匂いがする

褪(あ)せた金魚のマツちゃんが、  
浮かんでにじむ写真のはざ間で、  
切りとられた男女をすり抜け、  
ひらひらひらひら  
ひらひらひらひら  
ナイロンスカーフ泳がして

一体、

どこへ

流れるか

流されるのか

工場の脇のドブ川づたいに、

( 『ベットと織機』 未知谷、二〇一三年 )

## おーしらすま考

まつさか膨(ふく)れでおらっしやるなあ。ぎゅう、ぎゅっと、細帯(ほそおび)締(し)めで。

春(はる)ア来(くる)るたび、赤(あか)い衣(べ)ッコ欲(ほ)しがるがら、着膨(きぶく)れ上(あ)がっ  
てしまわれたア、鞆(まり)ッコみだいに肥(こ)えだったア、おーしらすまは。裾(すそ)めぐり  
やア、臭(にお)うがや。煮染(にし)めだみだいに、シヨボ垂(た)れだ何枚(なんまい)も、何枚(なん  
まい)も。

肉(にく)だよ、そりやア。毎年(まいどし)毎年(まいどし)、新(あだ)らし布(の)のッコおっ被(かぶ)  
りやア、熟(う)らすがや、中身(ながみ)のそれバ。ぎょうさん黴(かび)だちや飼(か)つとるだっき  
やア。春(はる)サ来(き)で、蠱(おご)めえとるぎやア、ほろほろほろほろ。

なアに、蚕(かいこの)唾汁(つばじる)だもの、肉汁(にくじる)だアもの、臭(にお)うがよ、絹糸(き  
ぬいど)は。製糸工場(せいしこうば)サ行(い)ったこだアねえのすか。鼻(はな)ッぽ火(ひ)イ付(つ)  
ぐどお、繭玉(まいだま)は、皮(かわ)だもの、生皮(なまがわ)だアもの。湿気(しっげ)で腐(くさ)  
りやア、還(け)えるンベえや、肉塊(しむら)サ。

おーしらすまは、木乃伊(みいら)でおらしやるがぁ、お蚕(かいこの)、

おーしらすまは、木乃伊(みいら)でおらしやるがぁ、娘(むすめ)ッコの。

昔(むがーし)なア、おったづなア、おーしらすまの心棒(しんぼう)みだいな娘(むすめ)っこが。ダ  
ゲーン、ダゲーン、木割(きわり)で両腕(りょううで)ブツ斬(ぎ)らい、立(た)つとっだア。人柱(ひ

どばしらアさね。人(ひと)の柱(はしら)はお手向(たむ)げするづよ、山神(やまがみ)に。お返(け)えしたアもの、ぎょうさんの木柱(きばしら)の。

立(た)ったア、あの娘(むすみ)やア、止(と)まんにやアもの、肩(かた)の血(ぢ)が。月(つき)の血(ぢ)が。ぎゅう、ぎゅツと、杵(くい)サ縛(しば)らい、飛沫(しぶ)イだつきやア、胎(はら)がらも。

止(と)まんにやア、息(いき)サ絶(た)イでも、

ヒン剥(む)がイでも、山神(やまがみ)に、生皮(なまがわ)バ。

おーしらすまは、身代(みが)アリどお、あんだアの、

おーしらすまは、身代(みが)アリどお、山神(やまがみ)さアまの。

春(はる)ア来(くる)たび、若(わ)げえ皮(べ)ツコ欲(ほ)しがるがら、膨(ふ)れ上(あ)がってしまわれたア、孕(ぼて)レンみだいに肥(こ)えだったア、山神(やまがみ)さアまは。祝(ほ)がっだなア、息(いき)んだなア。新(あ)らし花(はな)ツコ、山陰(やまほど)がら何本(なんぼん)も、何本(なんぼん)も。

何百(なんびやく)も、何千(なんせん)も、

年(とし)バ重(かさ)ねで、

拵(こ)せえでけろ、おらアの遺骸(むぐろ)お。ゆつぐら、ゆつぐら、着(き)しでけろ、お蚕(しら)の肌(はだ)コお。

赤(あ)いの、けらい。

染(し)みつちまアもの、止(と)まんにやアもの。裾(すそ)めぐりやア、臭(にお)うべや。

月(つき)だよ、

そりやア。

\*オシラサマは、主に東北地方に伝わる民間信仰の神体。家に祀られる。オツシャサマ、オコナイサマ等の呼称もある。養蚕の神、農神、家の守り神、仏様等、さまざまな性格を持ち定説はない。「けらい」|| 頂戴。本文の( )は、本来はルビ表記。

## ガラパゴス

茶飲みばなしだろ！、景気って  
お伽ばなしだよ！、株相場は  
やらかしてよ、

もっと、揶揄化してよ  
うんざりだね  
黒づくし、ユニクロづくしは

台なしだよ！、エロスが  
出しっぱなしだろ！、タナトスを  
いかしてよ、

もっと、異化してよ  
ケータイの 引つきりなし、  
マイクロソフトの 人でなしに

——着さしてもらえて なかったんじゃありませんか？  
国民服しか、  
震災のずっと前から  
わたしたち、  
不況という 津波 ばっかし恐怖して、

防護服です、  
ソレは

打たれ強いのです、  
高波に

6メートルまで 耐えられます  
いいえ、

水着 と言っちまおうか  
冷たいグローバル  
グロテスクなグローバルイズムの 胎内で  
溺れそう

リーマンに、  
サラリーマン  
欲しがりません

申しません  
もう しません、やりません  
女子も、男子も、中性子  
生殖しない ユニセックス

ほら、  
分裂する、

中精子は、  
なかなか融合しないんです、つて

放りっぱなしだろ！、核分裂も

野ざらしだぞ！、原発ドームの 胎内も

燃料棒が、安全帽が、卵細胞が、けちん坊が、どろぼうが、

冷房が、暖房が、

赤んぼうが、仏(ほとけ)ンぼうが、大海原に浮かぼうが、叫(お)らぼうが、

原子炉建屋がぶっ飛ばぼうが、

堤防が、陰謀が、官房が、

アンビリバーボーが、

インクレディボーが、

東電が、

ユニクロ着込んで

防御する、

津波

コンドームで

発電する、

半減期

で いいのか？

わたしたち

( 『ベットと織機』 未知谷、二〇一三年 )

\* 左記の六篇の詩のなかで( )で記載された部分は、本来はルビ表記。